

## この世はみな舞台

——「巖頭之感」にみる演技性

川戸道昭

明治三十六年五月、一人の青年が、日光の華巖の滝に投身自殺をとげるといふいたましい事件が起こった。その青年の名は藤村操。ふじむらみさお当時一高生であつた藤村は、自死をとげるに先立ち、滝上の樹木の幹に「巖頭之感」なる一文をしるして、死に臨む心情をこう吐露している。

《悠々なる哉天壤、遼々なる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーシヨの哲学、こゝろ竟つひに何らのオーソリチーに価するものぞ、万有の真相は唯だ一言にして尽す。曰く「不可解」。我この恨みを懐いて煩悶、終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何らの不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。》(68)

いかにも大上段に構えた明治の青年の心のありようを彷彿とさせる言葉である。日本に西洋流の新たな思想が根を下ろさんとする折も折、一人の青年哲学者がこのような文章を遺して自らの命を絶つたことに、日本の社会は大きな衝撃を受けた。それもそのはずで、見方によってはそれは日本の社会に対する大きな挑戦状、いや、それよりも人間存在そのものに対する大きな挑戦状と受けとれるものであった。

問題は、そのような青年の書き残した遺書の中にハムレットの台詞へのアリュージョンが見られるということである。一高生の自殺とハムレットの台詞、一見なんら関係がないかにみえるこの二つの事柄を一つに結びつける要因となっているのは、一つには、明治という時代精神であった。シェイクスピアの受容史研究という点からも大変興味深い問題を含んでいるように思われるので、藤村がハムレットの台詞を遺書に書きとめ自死をとげるまでの精神的経緯をたどってみることにしよう。

ハムレットという人物は、一面において、近代精神を身に備えた人物である。シェイクスピアが、わざわざ彼を宗教改革の拠点ともなったウイテンバーグの学校に学ばせているのも、そうした近代人たる性格づけを行おうとする意図のあらわれと受け取ることができる。そのような科学精神に裏打ちされた人

物にとつて、地獄だの亡霊だのという古臭い宗教臭をとどめたものの存在をおいそれと認めるわけには  
いかない。ハムレットは、夜な夜なエルシノア城の高台に亡くなつた先王の亡霊が現れると聞いて、自  
らの目で実際にその正体を確かめずにはいられなかった。そんな近代精神の持ち主ハムレットが実際に  
父の亡霊と対面した後に友人のホレーシオに向かつて漏らした台詞、それが藤村のいう「ホレーシオの  
哲学」のよつてきたる、「ホレーシオ、この天地のあいだには、人智の思いも及ばぬことが幾らもあ  
るのだ」<sup>(as)</sup> (福田恆存訳。原文 *There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt  
of in your philosophy*) という台詞であつた。

文中の「*your philosophy*」は「この世の哲学一般」を意味するというのが普通の解釈のようだが、藤  
村はそれを「ホレーシオの哲学」と受けとめた。「ホレーシオの哲学でも思いもつかないことがこの世  
の中にはいくらかもあるのだ」、そう彼は理解したのである。

問題は、その解釈よりも、それを口にする藤村自身の立場のほうだ。「ホレーシオ」云々の言葉を口  
にするからには、彼は、明らかにハムレットの立場に身をおいて、その遺書をしたためている。つまり、  
近代人たるハムレットの漏らした言葉を巧みに重ね合わせながら、日本の近代の夜明けに立つ若者が死

を決意するにいたった心境を吐露している。そこにこの青年の自殺にまつわる注目点の一つがある。

同様に、われわれが関心を向ける必要があるのは、その哲学青年の自殺の真相を新聞報道で探ろうとしている一般人の立場である。彼らの立場は、ちょうどハムレットの独白を目の当たりにしている観客のそれに似ている。違うのは、新聞の記事と、「巖頭之感」なる遺書をもとに、自分の頭のなかでフラッシュバック的にその死にいたる場面を再現しようとしている点である。いわば、心に描きだされた〈心裏劇〉というわけだ。

彼らの脳裏の舞台には、第一高等学校という学歴社会の頂点に立つ若きエリートが立っている。ほの暗い空気のなかに一人たたずむその青年の前には、一面に水煙をなびかせながら流れ落ちる奔流が轟音をひびかせている。青年はかたわらのミズナラの木にそと身をよせると、静かにこうつぶやいた。「悠々なる哉天壤、遼々なる哉古今……」。その独白が終わり、青年は手にした小刀で樹木の表面をけずり、今口にした独白を書きつける。その姿は、一見、『お気に召すまま』のオーランドの姿に似ていなくもない。そして、最後に一言「不可解」の言葉を口にしたかと思うと、身体を翻して滝つぼの底へと消えていった。観客の脳裏には、この世への思いの一切を断ちきって水の中へと姿を消していった

若きエリートの姿がいつまでも消えやらずに残っている。

これは実に巧みな演出効果である。ロレンス・オリヴィエ主演・監督の映画「ハムレット」（一九四八年公開）の独白シーンにも劣らない。藤村という人物は、哲学者というよりは、むしろ演出家といったほうが相応しい人物ではなかったか。少なくとも、こうした行動をとる藤村の脳裏には、のちにこれを目にする他者のことが意識されていたことは間違いない。そうでなくては、わざわざ樹木に遺書を書きつけるなどということはない。栃木県日光町の旅館から母親あてに華厳の滝に飛び込んで死ぬ旨を書き送っているというのも、だれかにそれを発見してもらいたいという願望があつてのことだろう。その脳裏には、多少なりとも、自死を演出しようとする意識が働いていたとみるのが筋だろう。

そして、もうひとつ、われわれが目しななければならないのは、これを演じる藤村とそれを観ている観客に共有される共通の意識である。いつてみれば、それは明治という時代に生きる人々の胸中に存在した共同幻想とでもいべきものである。その共通の意識を一言でいうと「一高生」というたつた三文字で言い表わせる。藤村操というと必ず言及されるこの「一高生」という肩書きこそは華厳の滝を舞台とする彼の内面のドラマに欠かすことのできない必須の前提条件となつているものである。彼の社会的、

精神的優位性はすべてこの「二高生」という地位によって裏打ちされ、保証されている。彼は、いわば学校制度という近代身分制度の頂点に立つ若きエリートなのだ。別の言葉でそれを表現するならば、熾烈な学力試験を勝ち抜いた「受験貴族」ということになる。演じる側も観る側もみなその優位性を了解した上でこのドラマに臨んでいる。

物語の最大の仕掛けは、この知的エリートが、なにやらシエクスピアの言葉とおぼしき台詞を口に、華嚴の滝に身を投げたことにある。演じるほうとしては、精一杯背伸びをして近代の学校教育からつかみ取った西洋の新知識を台詞のなかにもりこんだつもりだろう。観る側は、そこに限らない精神的な優位性、貴族性を感じとる。その知的、精神的エリートが、小刀を手にして「巖頭」に立つ姿は、不思議に、ハムレットの姿、とりわけ、エルシノアの城壁から、眼下の逆巻く波を見つめながら「生きるか、死ぬか……」の台詞を吐くオリヴィエ演ずるところのハムレットの姿に重なるものがある。少なくとも、「二高生」という属性に特別の意味を見いだした人々の眼にはそう映る。主人公の心の裡を読み解こうとする必死の試みがそこに開始される。近代教育制度を前提とする内面のドラマが成立する瞬間である。

そう。これは、近代の夜明けを迎えようとしていた明治という時代に成立した一大野外劇なのである。しかも、それはシエイクスピア劇へのアリュージョンをとまなう、一種の翻案劇であった。西洋演劇の翻案として、これほど人々の耳目を集めたものは、その後百年を経た今日に至ってもあまり類例がない。日本における西洋演劇の受容史は、緒につく瞬間から、かくも大きな挿話的事件を経験することになったのである。シエイクスピア劇を背景においた自作自演劇として、明治の時代精神に深く根ざした内面のドラマとして、永く記憶にとどめなければならない挿話的事件の一つだろう。

『明治のシエイクスピア』第一章より抜粋